

翼竜^{キョウリウ}

ギイイ……

ラモー・ルーの居室の扉が静かに開き、人一人が入れる隙間が出来る時、するりとキャロンが滑り込んで来た。素裸にアクセサリとして纏^{まと}ったボディチェーンをチャラチャラと賑やかに鳴らしながら、足早に部屋の奥へと向かう。

キャロンは勝手知ったる様子で、巨大な寝台の横にあるチェストの抽斗^{ひきだし}を開けると、ゴソゴソと中にある物の品定めを始めた。

部屋の隅にはいつものように鏡使いが座っていたが、キャロンには見向きもせず、物見の鏡を操作していた。

「これってどうかしら……」

彼女が取り出したそれは、デイルド……。ラモー・ルーがゴモロス神殿調査の為に城を空けてからすでに十日以上が経っていた。主のいない寂しさを紛らわすため、度々ラモー・ルー愛用の性具で自分を慰めていたのだった。

キャロンが濃紺色をしたデイルドを燭台の光にかざしてみると、亀頭部は翼竜^{キョウリウ}の頭に似

て尖端がやや尖り、雁首には角のようなイボイボの突起、竿の部分は節樽立ち、表面には鱗のようなブツブツとした造形がされていた。

「……ぷふっ！ これ、ちよつとキーラに似ているかも」

おそらくは翼竜キーラの頭をモチーフに拵こしらえられた亀頭の形に、かつての相棒の間の抜けた顔が重なり、キャロンは思わず吹き出してしまった。

「ねえ、あなたも翼竜キーラに似てると思わない？」

まるで子供がおもちやを自慢するかのように性具を見せつけてくるキャロンを、鏡使いは無視し続ける。

「ねえってば！」

鏡使いの目の前に、ディルドがにゅつと突き出される。

「……、おまえに入るのか？」

ディルドを邪魔そうに押し返す鏡使い。

「入るのか、って……やだあ、エッチい」

そう軽口を叩いてはみたものの、キャロンはディルドを顔の前に掲げ、真剣な面持ちで見つめる。

(硬さは……)

持った感じは硬過ぎず柔らか過ぎず、強く握ると薄く手形が残るくらいに縮む。また、突起という突起は柔らかいがコシのある造りになっていて、敏感な部分が傷つかないようになっっていた。

（うん、流石はラモー様。次、太さは……、と）

竿をシコシコと扱しどいてみた感じ、太さはニンジンよりちょっと細いくらいだった。

（あはっ、あたしには丁度イイ感じよね。そして長さは……長さは……ん？）

キャロンは恐る恐るデイルドを下腹部あてに宛がってみる。

「やだ……」

息を呑むキャロン。亀頭に造形された翼竜キーラの嘴くちばしが臍へそのあたりをツンツンと触っていた。

（こんなの無理よ無理無理！）

そう思う一方で、キャロンは乳首がツンと硬くなってくるのを感じていた。

（でも……、でも……、これを使ったらあたし、どうなっちゃうんだろう）

そんなキャロンの恐怖心と好奇心の間を揺らぐ心を見透かしたように鏡使いが呟いた。

「子供にはまだ早い……」

「なっ、なによお！　そうやって馬鹿にして！　大丈夫よ、これ、ラモー様より小さい

んだし！」

キャロンがぷうっと頬を膨らませ仁王立ちになる。

「そういうのが子供なのだ……」

鏡使いの追い打ちの言葉がキャロンの怒りを爆発させた。

「きーーーーっ！」

奇声を上げながらデイルドで鏡使いに殴りかかったキャロンだったが、その一撃はひらりと躲かわされ……、

ビターン！

勢い余って床に倒れ込んでしまった。

「痛うーい！　なんで避よけるのよー！」

床に這いつくばったままキャロンが鏡使いを睨みつける。……その時、物見の鏡に映っているサラが彼女の眼に入った。

（ああ、サラさんだ……。いつも美しくて、神秘的で、それでいて女のあたしでも見とれてしまうくらいエッチな体のサラさん。……自分といえば、こんな無様な格好で）

キャロンは自分の惨めさに黙りこくってしまった。

「用が済んだなら、出て行け……」

鏡使いはキャロンを一顧だにせず、鏡に映したサラの胸元を拡大し、彼女の形の良い乳

房を鑑賞し始めた。

自分の小振りな胸に目を落とすキャロン。

「うう……」

更なる劣等感に苛さいなまれ、その場に居たたまれなくなつたキャロンは、トボトボと部屋を出て行く。彼女が出口の扉に手を掛けようとしたその時……、

「……あーっ！」

叫び声を上げると、脱兎の如く鏡使いに駆けよつた。

「なんでサラさんが映ってるの？ ちょっとやだ！ 覗き見？」

キャロンもサラも、ラモー・ルーの命により、素裸で過ごしており、今更覗き見されていても、なんとも思わない。生来、羞恥心が欠如しているサラなら尚更だろう。

でも、それでも憧れのサラが盗み見されているのは嫌だと思つたキャロンは、鏡使いの腕を掴む。

「ちよつとお、やめなさいよ！」

「……」

キャロンの制止を無言で振り解ほどき、鏡使いはサラの視姦を続ける。

「ちよつと！」

再び鏡使いの腕にしがみつくとキャロン。

「やめなさいってば……きゃあっ！」

しかし、鏡使いは見た目とは裏腹に豪腕の持ち主で、キャロンは振り回されるだけだった。

鏡にはサラの体が様々な角度から映されていき、それを為す術なく見つめるキャロン。

「やだ、そんな……嫌らしい……」

サラとは一緒におしゃべりをしたり、入浴したり……、サラとラモー・ルーのセックスだって見た事がある。とはいえ、キャロンは憧れの人故に見ないよう^{ゆえ}にしていたサラの体の様々な場所を、鏡使いは次々と無遠慮に映していく。

「……ああ、サラさん、ほんと綺麗」

特にサラのプロポーションに魅力を感じていたキャロンは、いつしか鏡の中の彼女に見とれてしまっていた。

「……ねえ、次はもうちょっと下の方から見てみましょうよ」

そして、ついには覗き見の共犯者と成り果てていた……。

サラがベッドで眠りについたところで、二人の覗き見はお開きになった。

「もういいだろう、出て行け……」

「えー、他にも何か見せてよ。……あつ、そうだ。次はラモー様を見てみましょうよ。今何をしてるのかしら？」

キャロンが鏡使いの横から身を乗り出し、何やら呪文を唱えた。もちろん、彼女が物見の鏡を使える訳はなく、見様見真似だった。

鏡の中のサラが波打つように歪んだかと思うと、鏡面は太陽のような強い光を放ち、周りを白く塗りつぶした。

「なにをする！」

鏡使いはキャロンを押しのと、呪文を唱えながら慌ただしく両手を動かした。しばらくすると、鏡の暴走は収まり、いつもの薄暗いラモー・ルーの居室が帰ってきていた。

「勝手に触るんじゃない！」

「ういじゃない、少しくらう……」

再び鏡を操作しようと躡り寄ってくるキャロン。

「よくはなう」

「じゃあ、ラモー様を映して」

キャロンの眼は鏡使いの隙を窺うかがっている。

「……」

これ以上出鱈目でたらめをされては堪たまらぬと観念したのか、鏡使いは澁々と鏡の操作を始めた。鏡に映っていた二人の姿がグルグルと渦を巻きながら消え、代わりにゴモロス神殿大聖堂が浮かび上がってきた。

「あつ、あそこ！ ラモー様じゃない？」

キャロンが指差すそこには、天井から差し込んだ月光の下、小山のような黒い塊がモゾと動いていた。

鏡使いは両手を外側に拡げるように動かし、彼女の示した場所をズームアップした。

「これでよいか」

「ありがとう……あつ！」

ゲル状の触手に絡め取られ宙に磔はりにされた見知らぬ少女。そして、少女の初々しい裸身にむしやぶりつく魔ラモー！・ル獣の姿がそこにあった。

「……」

思わぬ光景さつきに先までコロコロと忙しく変わっていたキャロンの表情が凍り付く。

「大方、ディメルンの森に迷いこみ、黒騎兵に捕らえられたのだろう」

「……、あの娘こ、どうなっちゃうの？」

言葉を絞り出すように問うキャロン。

「どうなるかはお前の方がよく知っているだろう」

キャロンがラモー・ルーの寵妃ちようひとなつてから彼の悪行は鳴りを潜めていたが、それ以前は多くの女性を掠さらつては慰み者にしていた。中には陵辱に耐えられず廃人になったり、命を落とした者も数多くいるという。キャロンは今、魔王の本性をまざまざと見せつけられていた。

「ねえ、どうしよう？ どうしたらいい？」

声を震わせながら縋すがるように聞くキャロン。

「……」

鏡使いは何も答えない。

「ねえ……」

長い沈黙に堪らずキャロンがもう一度聞こうとしたその時、ようやく鏡使いは口を開いた。

「……先刻はおまえに私の知らぬサラの見所を教えてもらった」

今はそんな事を言ってる場合じゃないのにと、眉をひそめるキャロン。

「その礼として、ラモー様には娘の扱いを悪くはしないよう、伝令を送っておこう」

「えっ？」

「キャロン、王妃の名でな。おまえの願いならラモー様も聞き入れてくれよう」

「ああ……ありがとう」

キャロンはほっと胸をなで下ろした。

「願いが届く前に壊れなければ、の話だがな……」

「大丈夫よ、あたしが耐えられたんだから……」

物見の鏡に大写しにされた少女を見守るキャロン。

ラモー・ルーの太い舌が少女の喉奥まで犯しながら唾液を流し込んでいく。

(ああ、ラモー様の息苦しいほどのディープキス……)

キャロンは唇を軽く開き、舌を絡ますように動かしていた。

(……はっ、あたしったら)

少女を助けられるという安心からか、彼女へ向ける自分の視線が性的興味に変わっていることに気付くキャロン。

(ダメよ、そんな風に見ちゃ……)

少女が苦しさに耐えかねイヤイヤと首を振る度、彼女の艶やかな黒髪つやのポニーテールが宙に踊る。

(あたしの初めてもあんな風だったのかな……)

少女と魔獣のおどましいセックスシーンが、ラモー・ルーと出会った日の事をキャロンに思い出させていた。

(……そんな事考えちゃダメ……、ダメなんだから……)

しかし、いけないと思えば思うほど、あの日の記憶が鮮明に脳裏に蘇ってくる。

数多^{あまた}の性戯を仕込まれてきたキャロンにとって、ラモー・ルーに処女を奪われた忌むべき記憶が今では忘れ得ぬ甘美な思い出となっていた。それが目の前で再演^{リプレイ}され、彼女の体に刻まれた性^{ステイグマ}痕をも呼び覚ます。

(ああ……、ラモー様との初体験を思い出しちゃう……)

両脚を大きく広げられ、無防備となった少女の幼いヴァギナを蹂躪する魔獣のペニス。

(体に電気が走ったような初めての痛みは今もはっきりと覚えてる……)

亀頭が容赦なく少女の子宮を打ち叩くピストン運動で彼女の体が跳ねる。

(無理矢理挿れられて、胎^{おなかのなか}内を激しい鼓動で撲^ぶたれたのが忘れられない……)

ぷるんぷるんと弾むほどよい大きさの二つの乳房には触手が巻き付き、搾乳するかのような動きで乳首を絞り上げていた。

(触手に体中を舐め回され、吸い付かれ、乳首を虐^むめられる快感が肌から消えない……)

両手で自分の体を抱きながら、うっとりとした表情を浮かべるキャロン。

魔獣が貪るように少女を陵辱し続けていると突然、彼女の強張^{こわば}っていた体からふっと力が抜け、魔獣の触手状ペニスに貫かれるままとなった。少女の表情を見ると苦悶の中に時折^{うつつ}薄らと笑みを浮かべていた。

「壊れてしまったか。もう伝令は必要ないな」

鏡使いが言った。

(ううん、違うわ……)

彼女の様子はキャロンには違って見えていた。

(ラモー様に牝^{おんな}の悦びを教えてもらったから解る)

少女は自らラモー・ルーに子宮を捧げるかのように、まだぎこちない動きで腰をくねらせペニスの打撃を受け止めていた。

(あの娘^こはたった今、その悦びを知ったんだわ)

少女のヴァギナから止め処^{とど}なく溢^{あふ}れる愛液が触手状ペニスを伝って滴り、床に染みを作り始めていた。

(初めてでラモー様に牝^{おんな}にしてもらうなんて、焼けちゃう……)

彼女への嫉妬を感じつつ、少女が牝へと変わっていく姿に、キャロンは魅入ってしまった。

少女の背格好や年の頃は自分と同じくらい、黒髪ではあったが、同じロングポニーテール。その事がまるでラモー・ルーに犯される自分を第三者の視点から見ているような錯覚をさせ、キャロンの子宮はラモー・ルーを求めキュンキュンと疼うずいていた。

「あああ……ラモーさまあ……」

やがてキャロンは手にしていたデイルドを体に擦こすりつけていた。

「ああ……んっ、はあああ……」

デイルドを股に挟みゴツゴツとした竿でクリトリスを刺激すると、堰を切ったように愛液が溢れ出し、くちゆくちゆと卑猥な音を立て始めた。

「ああん……もうダメ……我慢出来ない」

キャロンが隣の部屋に飛び込み、何やらズルズルと引き摺ずり出してきた。……それは子馬ほどの大きさのペガサスの揺り木馬だった。

以前にラモー・ルーとの性戯で使った事があるのだろう、キャロンは手慣れた感じでペガサスの木馬の鞍ペガサスにデイルドを取り付けた。

鞍の上にそそり立つデイルドは更に長くなったように見え、キャロンの被虐性欲をも搔

き立てる。

(あたし、今とってもエッチな気分なのに……)

ディルドの先っぽに付いた昔なじみの顔をツンツンと突く。

(この顔を見ると、子供みたいにはしゃぎたくなっちゃう)

「じゃあいくわよ、キーラ」

キャロンはひらりと木馬ベガサスに跨がると、翼竜キーラへ腰を落としていく。

「んっ、あああ！」

ヌツヌツヌツ、

翼竜キーラの頭がゆっくりと墜壁を掻き分けていく。

「ああ、キーラ、キーラきついよお！ はああああ……んっ」

その長さの三分の一ほどが入った所で翼竜キーラは奥に達した。しかし、重力がキャロンの体を引っぱって翼竜キーラの頭がグイグイとキャロンの胎内を圧迫する。

「ひっ、ぐう、……ダメ、キーラ、そんな深くに行っちゃあ……あああん！」

どうにか翼竜キーラを御ぞよすることが出来たキャロン。しかし、翼竜キーラは彼女が鞍に座る事を許さず、爪先立ちを強いていた。

(あんもう、この翼竜キーラもあたしの言う事を聞いてくれないんだから……)

ちよっぴり可笑しさがこみ上げ、油断してキャロンが力を抜いた瞬間、すかさず翼竜は子宮に頭突きを喰らわした。

ズン！

「あひゅっ！」

痛みが混じった稲妻のような快感がキャロンの体を突き抜けていった。

「はううう……、もうキーラったら、……」

目を潤ませながら、キャロンはそろりそろりと体勢を戻し、息を整えると、木馬の頭をしっかと掴む。

「はあ……はあ……。じゃあ、キーラ……行くわよお……加速装置っ！」

無邪気な掛け声と共に勢いよく木馬を前後に揺らし始めるキャロン。木馬の動きとキャロンの動きがワンテンポずれることにより、ピストン運動が生まれる。

「はんっ！ あっぐっ！ はんっ！」

翼竜のイボイボの角と鱗のブツブツが肉襞を搔きむしり、嘴がポルチオを啄む。

「あんっ！ あんっ！ ……いっ、ひっ、くっあああっ！」

時折勢い余って、子宮を食い破られそうな翼竜の突進がキャロンに嬌声を上げさせる。牝である器官を牡に嬲られる悦び。それは、ラモー・ルーに最初に教え込まれた悦び。

キャロンは鏡の向こうにいるラモー・ルーを潤んだ瞳で見つめながら、少女を犯す魔獣^{けだもの}のペニスの動きにシンクロさせるように、木馬^{くば}を揺すった。

「ああっ、ああっ！ ラモー様、あたしの膣^{こじ}を……掻き混ぜて！」

それはラモー・ルーと擬似的にセックスをしている感覚をキャロンにもたらしした。

「はああん……、うっあああんっ！」

グチュツ！ ズチュツ！ グチュツ！

ピストン運動で蜜壺から掻き出される愛液が飛び散り、牝^{キャロン}の臭いが香り立つ。

ズチュツ！ グチュツ！ ズチュツ！

翼竜^{キョウラ}がキャロンの子宮を打楽器のごとく連打し、淫猥な鼓動^{ビート}を刻む。

「っあああ、ラモー様……もつと、……もつと子宮^{あたし}を突いてください、はんっ！」

グチュツ！ ズブチュツ！ ブブチュ！ ……

鏡の向こうの少女は幾度となく絶頂を迎えた末、ついには気を失って宙吊りにされた体がだらりと力なくぶら下がっていた。

「んっ！……ひっ、ああああっ！」

ほぼ同時にキャロンも擬似セックスに満足し果てる。

「はあ、はあ……、気持ち良かった、はあ……」

キヤロンは木馬ベガスの頭に抱きつくように体を預けると、ぬらぬらと輝きそそり立つ翼竜キエラに花卉はなびらを優しく擦りつけながら、オルガスムスの余韻に浸る。

「うふっ、キエラ、また相手してね……」

キヤロンは翼竜キエラを摸したディルドにすっかり愛着を感じてしまっていた。

(あはっ、そうだ！ 従者に言って翼竜キエラの木馬も作ってもらいましょ、ムッフ)

キヤロンがふと鏡使いの方に視線を移すと、相変わらず鏡をじっと見つめたままだった。

(……もう、間近であたしがこんなエッチなことしてたのに、ずっと無視って酷過ぎない?)

そう思っていると、珍しく鏡使いがキヤロンの方を振り向いた。

(あはっ！ やっぱり気になるのね、ウッフ)

今や露出狂の性癖も開花させようとしているキヤロン、観客がどんなポーズをすれば欲ぶか心得ていた。

「あふん……」

木馬ベガスの上で仰向けになり、気怠そうに大きく脚を拡げてみせる。唇、乳房、乳首、臍、下腹、そしてクレバスへと指を這わせ、愛液に濡れた花卉を開く。彼女の息遣いに合わせ、

パクパクと呼吸をしている膾口が丸見えになると同時にキャロンの牝の臭いがムワツと辺りに広がった。

(ウフフ、ほら感想を言ってみなさい、ほらほら)

「……もうここに用はないだろう。さっさと出て行け」

鏡使いはキャロンが想像だにできなかった台詞を吐くと、ふいっと再び鏡の方に向いた。

(なっ、失礼しちゃう！)

抗議を口にしようとしたその時、

「やはり伝令は必要なかったな……」

鏡使いが続けた言葉にドキリとして、鏡の方を見るキャロン。

……ラモー・ルーが少女を磔から降ろし、彼女の体を祭壇に横たえていた。その扱いはセックスの時とは打って変わって、まるで水晶細工を扱うような丁寧なものだった。

(よかった……)

ほっとすると同時に、ラモー・ルーに気に入られたあの少女がこの城へやってくると思うと、胸がちよっぴりザワつくキャロンだった……。

「翼竜」キーラ おわり